

特集

藝大アートプラザ

開かれたユニバーシティ・シヨップ



芸大の教育研究成果を発信・販売し、芸術を身近なものにしてゆくことを
目的に設立された藝大アートプラザ。

二〇〇五年十一月のオープンから現在までの活動をとおして、
“開かれた東京芸大”の可能性を探る。

【座談会】

河北秀也

教授 | 美術学部デザイン科 (視覚・演出)

三田村有純

教授 | 美術学部工芸科 (漆器)

守山光三

教授 | 音楽学部器楽科 (ホルン)

鶴見俊一郎

株式会社藝大Bion代表取締役社長



ギャラリー・ショップとしての展開

河北 ユニバーシティ・ショップには二種類ありまして、生協のような学生に向けたショップと、学外に開く形のものであります。藝大アートプラザは「学外に開く」ものですけれども、各大学がそれを展開しようとしているところで、今の学長以下、やろうということになって設立したわけです。ところが国立大学は、ものを直接販売できないので株式会社藝大Bion(ビオン)さんに販売を委託しています。

そもそもは、教員、それから研究室の研究成果を発表、展示して、それを販売しようというのが大きな目的です。芸大には美術学部と音楽学部があつて、なかなかおもしろいショップの展開ができるなとはつねづね思っていたんです。

守山 音楽家には直接作品を店に並べて売るといふ発想がないんですね。アートプラザがオープンした当初は、音楽学部で何を売るかというか、それよりも売れるものがあるのかという疑問のほうが大きく、何が始まるんだという気持ちで眺めていました。ところが一年経って、コンサートのチケットやCDも売れますし、著作物が売れることに気がつき始めた。そういうことでショップの存在に対して、ようやく意識が高まりつつあるというところが音楽学部の現況です。

鶴見 私は平成十年、大学美術館が開館したときに、ミュージアム・ショップの立ち上げに社外からボランティアという形でかわつたという経験があるんです。大学が直接販売することは難しいということから、美術館協力会(会長 中根寛氏)をつくって、その下でショップを経営することをやっております。



河北秀也(かわきた・ひでや)

教授 | 美術学部デザイン科(視覚・演出)

一九四七年福岡県生まれ。

七一年東京芸術大学美術学部工芸科ビジュアルデザイン専攻卒業。

九一年東北芸術工科大学デザイン工芸情報デザイン学科教授。

二〇〇三年東京芸術大学美術学部デザイン科教授。

(〇五年から藝大アートプラザ所長)

日本クラフトティックデザイナー協会 日本パッケージデザイン協会 日本デザインコンサルタント協会 都市環境デザイン協議会 日本デザインコンサルタント協会 都市環境デザイン協議会

ましたが、ショップとしてはスペースが少ない。芸大としてはもっと広いスペースでミュージアム・ショップを設けるべきではないかという提案をしてきたわけです。できれば美術館の中にそういう設備があるのが望ましいと思っていたのですが、いろいろな事情で現在の場所になったと聞いています。したがって藝大アートプラザは最初はショップの構想で、文房具や画材を含めた、学生さんの必需品からアートまで扱うショップをつくるというのが初めのアイデアだったように私は思っております。

その間に大学が独立行政法人になったということもあり、開かれた芸大を具現化する目的で、単なるショップから現役の先生方や学生さんの作品を展示・販売するギャラリー・ショップに方向が変わりました。当初、ハードウェア(建物や内装)のほうは着々と進んでいたのですが、ソフトウェア(作品)を集めるのに苦労しました。学校の共同利用施設ですから、どんな作品が集まってきて大変になるんではないかと思っていたんですが、意外に物が集まってこなかったといういきさつがあります。

作品が流通する現場

河北 藝大アートプラザとほかの大学のユニバーシティ・ショップとの違いを言いますと、なによりも「芸術大学」と普通の大学の差ということがあります。アートプラザで扱っているのは、単に大学の名前をブランド名として商品をつくるというのではなく、作品そのものを展示販売するという意味で、商品構成がまるで違います。

三田村 アートプラザのオープン当初は、社会に問いかける作品をストレートに置けるようなギャラリー空間になっていませんでした。美術学部の先生方が、作家として作品を並べたことを躊躇されたのは、その点が大きな問題としてあったと思うのです。作品を並べるとなると、空間、照明、それから周りの関係まで私たちはプロデュースしていきますので、どういうふうにかかわっていただけるかという不安が教員の中にあつたと思います。ただオープンしてからは、大学教育のなかでのメ



三田村有純「純一」(みたむら・ありすみ「じゅんいち」)

教授 | 美術学部工芸科 (漆芸)
一九四九年東京都生まれ。
七三年東京芸術大学美術科工芸専攻卒業。
七五年東京芸術大学大学院美術研究科漆芸専攻修了、七八年同研究室研究生修了 / 東京芸術大学美術学部非常勤講師。九〇年美術学部工芸科助手、九四年講師、
九九年助教、二〇〇五年教授。(〇四年から美術学部国際交流部長兼、
一九八八〜九九年ベルギー王立H.I.F.A.に客員研究員として在籍。
ヨーロッパ十一か国で漆の美について調査研究。
日展評議員、現代工芸美術家協会評議員、九つの音色同人。

リットに気づかされつつあります。具体的に言いますと、若手の教員が学生の指導をしながら作品をつくるというプロセスの中ででき上がったものが、アートプラザに展示され、お客さんの手に渡っていくのだということが、教育の一貫としてできるといえることです。作品というのは人の手に渡ることでの生活を豊かにします。「芸術経済学」的な学科は大にはありませんので、教育の現場としてもひとつ有意義な点があると認識しています。

鶴見 奏楽堂で行なわれる演奏会のチケットを、公演の二か月前からアートプラザで扱っているのですが、とてもよく売れています。学校から委託されたチケット会社との販売契約になっていまして、都内に売る場所が何か所かあるらしいのですけれども、非常に反響がいいです。

守山 アートプラザで奏楽堂のチケットを扱っていただけるといえるのは、音楽学部としてはとてもありがたいことですね。つい最近では総売上の三〇パーセントにも達したチケットもありました。

鶴見 これはすごいと思ったのは「藝大オペラ」で、アートプラザの前にお客様方が九時半ごろから並ん

GEID

違いました、なかなか不特定多数に対してチケットを出しても振り向いてくれないんですね。奏楽堂のコンサートのチケットがアートプラザで手に入るといふ評判が定着すれば、もっと伸びていくのではないかと思います。

鶴見 チケットをお買い上げになれる方は音楽愛好家で、アートプラザに並んでいるものの概ねは美術愛好家なんですよ。ですから音楽愛好家が来られることによって、その方々がまた美術に触れるわけです。お客様方が切符を買うために必ず月一回は来られることで、リピートユーザーになるわけですね。

でいらっしやるんです。初めは何事かと思ったら、オペラの切符をお求めに来られた。二日間にわたる公演で、私どもがお預かりしたチケットが一時間で完売しました。奏楽堂のチケットをプラザで扱うようになったのは昨年の二月からなんですけれども、割合に大きな売上げを占めております。

守山 そういう売れ方は、クラシックのコンサートに関してはほとんどないので、とてもおもしろい現象だなど思っております。クラシックはポップスと

守山 演奏というのはそのままでは売れないんですね、チケットという形でしか売れない。その演奏の結果は商品にしないと世の中に出ていけません。なかなか非商業ベースでやってくるところはないんですね。学内でも演奏したものを商品化する部署や、またそこでつくられた商品をアートプラザで販売できれば、もっと演奏そのものが活かされるのではないかと。芸大オリジナルのCDなど、これは可能性がないことはないですね。



守山光三 (もりやま・こうさう)

教授 | 音楽学部器楽科 (ホルン)
一九四四年釜山市生まれ。
六七年東京芸術大学音楽学部器楽科ホルン専攻卒業。
六七年旧西ドイツ・ベルリン音楽大学入学。七二年同大学卒業。
この間、東京交響楽団、ベルリン交響楽団、ベルリン・ドイツオペラ管弦楽団、ライン・ドイツオペラ、ドゥイスブルク交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団で演奏活動。
七三年からドゥイスブルク市立ニダーライン音楽学校講師を兼務(七八年)。
七九年東京芸術大学音楽学部器楽科非常勤講師。
八七年音楽学部器楽科助教、九九年教授。
(二〇〇三年東京芸術大学評議員、〇四年から教育研究評議会評議員、〇五年から学長特命)。

そうすると美術と音楽のコラボレーションがそこで可能になってきますね。例えばジャケットを美術学部でつくってもらう、中身は音楽学部で録音する。千住キャンパスにすばらしい録音スタジオができたので、それを活用すれば十分可能なんです。あとはそれを商品化してくれるところなんです。非常に専門的な著作物が芸大には眠っているんです。音楽学部にも美術学部にも。例えばオックスフォード大学は出版局を持っていて、そこへ問い合わせればありとあらゆる専門書がすぐに届けられるんです。非常に専門的なものに限りますけれども、最終的にはそういうところまで広がるとおもしろいのではないかと思います。

美術学部と音楽学部のコラボレート

三田村 コラボレーションということで言いますと、私個人がここにかかわった仕事ではタクト箱をつくりましょうというお話をいただいて、模様と形をすべてデザインしたんです。音楽の世界では、楽器にはお金をかけていらつしやるわけですよ。では指揮者の場合、指揮棒を漆の箱に入れてお持ちになればと考えたんです。そういう意味で今までありそうでなかったものですね。

守山 あのタクト箱を見たときには、瞬間胸が震えました。三田村先生が音楽のことをこんなに思ってくださっているんだという、そういう思いも伝わってきますので。

三田村 漆という素材と、蒔絵という技法は、日本の美術の象徴ですよ。このように今後も美術学部と音楽学部がコラボレートして、総合的な文化発信ができると思います。

河北 それに芸大はどこか閉鎖的で、普通の人は入

りにくい感じがありました。大学美術館ができて、アートプラザがオープンして、ずいぶん開放的になりました。

鶴見 最初のうちは「ここは芸大ですか」という質問がお客様から出ました。「随分斬新なものができましたね」と。それからいまままで開いてなかった「黒門」が開きましたでしょう。それはものすごくうれいというのが、来られる方々の最初の感想ですね。それとやや時間が経って、アートプラザの前の庭を待ち合わせ場所になさっている方が多くなってきました。

さらにおもしろいのは、待ち合わせスポットというところでテレビの番組に取材されるとその日の午後からどっと来場者が増える。そういう現象からアートプラザに来るといい作品に出会えるという雰囲気が出てきたと思うんです。

また、昨年の九月から十月にかけて大学美術館で行われた日本と韓国の漆の展覧会とタイアップする形で、三田村先生にご支援をいただいて研究室単位の「うるしのかたち展」を催しました。大学美術館では販売しませんので、そのような作品を購入できるとあって、非常に好評でした。

河北 このたび「藝大アートプラザ大賞」というのをやりました。いまままで学部の学生のものはアートプラザの商品の対象にしないということになっていました。だから少しずつ学生にも裾野が広がっていくということですね。

芸大文化を享受できる空間

三田村 僕の周りでも、芸大の中へ足を踏み入れたことがないという方が多いのですが、特に奏楽堂や

美術館は何かイベントがないかぎり入れない気がします。でもアートプラザという組織は、大学に来るといって感じではなくて訪ねることが出来る場所ですね。なおかつ大学がふだん教育・研究していることを発表できる、わかりやすい組織体です。

実はオープンしてからこの一年間、どなたもやっていなかったことなのですが、日ごろ教育・研究している成果を並べさせていただきたいと思ひまして、私どもの研究室で漆芸の教員七人の展覧会をやりました。「うるしのかたち展」のことです。アートプラザを展覧会場にしようということで、ダイレクトメールを作りまして会場を貸していただいたんです。その結果どういことが生まれたかというと、出品した側として非常に嬉しかったのは、作品が実に良く見え、評判も良かったことです。アートプラザには愛好家グループがすでにいるのではないかとというぐらいお客様がいますね。これはやっぱり一年間の結果なのかもしれませんけれども、発信する側のわれわれと来場者の方々、それをつなぐBionさんが共通の価値観を持った組織として、いい形で今、成果を結び始めたと思っています。

そこで二つ提案があるのです。ひとつは芸大は次の世代を担うアーティストを養成していますが、ここに来られるお客様に、この人は将来伸びるとい人材を探してほしいのです。

もうひとつは、アートプラザ総体を、芸術文化を享受できる空間にしていくべきということです。ここに来たらいい音楽が聞けて、いいものも見られて、なおかつ自分を買える。例えば海外旅行に出ると、ミュージアム・ショップでちょっとしたお土産を必ず買いますよね。そのちょっとしたものが本物で、これからの有望なアーティストのものだとなったら大変な喜びでしょう。それが実現すればアートプラ

LAZA

ザは芸大の中心になると思います。奏楽堂と美術館とは違った意味で、コラボレーションを含めた総体が発表できる場所になるのではないかと。そこに期待しているんです。

守山 音楽学部にも若い学生に優秀な人が多いんですが商品化されないんです。そういう人たちに對して、アートプラザで社会に對して商品として売り出していたら、新人発掘の本場にいい場所になると思うんです。ただ、CDやDVDというのは、売り出すための作戦が必要なんです。そのためプロデュースみたいなものも必要になってきますから、それは応用音楽学や音楽環境創造科の課題だと思います。そういうところにも教育的な価値も出てくるんじゃないかと思えます。

河北 美術学部と音楽学部が組めばいいものができると思えますよ。だから、これからの課題は芸大の商品企画です。

三田村 今まで音楽のほうでやっていたいろいろな取り組みの中で、僕も三回コンサートのポスターをつくらせていただきました。そのポスターだって売るべきだと思うのですけれど……。

守山 演奏会だけでなくってしまふのは本当にも

つたいないです。クラシックの音楽会はポスターでチケットが売れることが多いんですよ。ですからポスターの原画を売っていただけると、非常におもしろいなと思うんですけれど。

三田村 東京芸術大学を社会に對してきちんとした形でご理解いただく機関として、アートプラザはいちばんわかりやすいのです。だれでも自由に入って来られて、だれでも楽しめて、芸術ってこんなに身近ですばらしいものだということを実感していただける場所だと思います。

芸術の発信拠点として

鶴見 アートプラザには海外からお越しのお客様も数パーセントほどいらっしゃいます。最近の例を申し上げますと、お年を召したご夫妻とお子さんだと思われんですが四人でお見えになりました、スーヴェニール（土産物）をお求めになりました。そのときお買い上げになられたのが漆のアクセサリーなんです。そのほかで言えば、例えば精密複製画のようなものですね。外国の方が好まれるのは、いかにも日本で買い求めたに違いないと思われるよう

なものなんです。

守山 逆に外国に行くときに、何か芸大の象徴的になるようなもの、シンボルみたいなものを持って行きたいとも思いますね。芸大でつくった、芸大のものともわかるようなお土産がほしいと思つています。

河北 そのためには芸大のロゴタイプをつくらなければいけないですね。芸大のシンボルとして認められるロゴタイプが決まれば、芸大のおみやげであるとか記念品が開発できるのですが。

三田村 ロゴタイプのついたグッズを、美術と音楽一緒になって売り出すことができたなら、われわれのほうからもたくさん提案ができます。

ここからは無限に芸術を発信できます。アートプラザに来たら、今の芸術のいちばんすぐれた部分が見られます。芸術を発信できるこんなに優れた教員と職員と学生を抱えている大学は世界にないのです。それを総体でわかりやすく発表できる機関として発表させていくつもりですので学内外のさまざまな方に応援していただきたいと思います。



鶴見俊一郎（つるみ・しゅんいちろう）

株式会社藝大Bion代表取締役社長

一九三六年神奈川県生まれ。

六〇年東京芸術大学美術学部工芸科図案計画専攻卒業。

六〇年株式会社日立製作所入社。宣伝部で広告・宣伝活動に従事。

七一年同社コンピュータ事業部で製品企画・マーケティングを担当。

営業を経て七九年OA事業部の設立に参画、同事業部システム部長、

パソコンCAD設計部長、八七年情報事業本部営業企画部部長。

九〇年株式会社日立ビジネス機器取締役を歴任。

九三年財団法人鉄道総合技術研究所へ転属。

九八年株式会社エイアール総研情報システム専務取締役。現在同社取締役顧問。

財団法人東京フィルハーモニー交響楽団理事、日本情報処理学会役員。

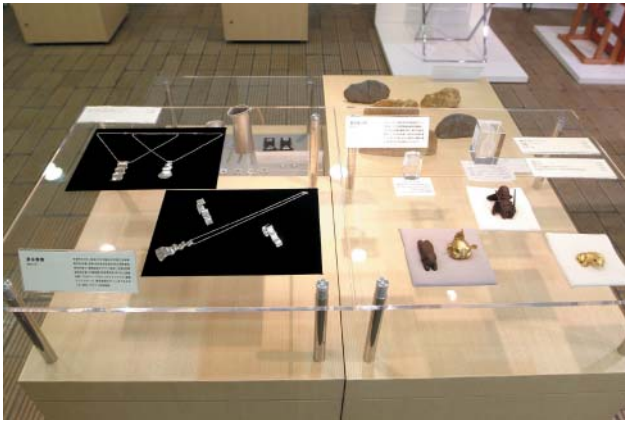
GEIDAI ART P

GUIDE to GEIDAI ARTPLAZA

教員の手によるオリジナル作品から、アクセサリー、什器、書籍、CDまで、幅広い品揃えの藝大アートプラザの店内を紹介する。



上：アートプラザ・オリジナルのTシャツ 右上：大学院生作品
右中：日比野克彦教授のポスター 右下：東京芸術大学2007カレンダー
柴田是真筆「明治宮殿天井画下絵」 左下：精密複製画（序の舞、
悲母観音）



右上・右下：ガラス研究室所属教員の作品の数々 左上：米林雄一教授（左）、鶴岡鉦次郎（右）による金属製のアクセサリーや小物 左下：清水泰博助教授作のアクセサリー（左）、籾内佐斗司教授作の文鎮（右）



漆芸研究室教員の手による什器や工芸品



上：三田村有純教授作の口ハス持ち歩き箸「天空」
右：平松保城名誉教授作の指環の数々



上：教員がかかったCDを揃える 左：専門書、入門書から珍しい海外の写真集も並ぶ



上：河北秀也教授による「いいちこ」関連の商品や広告
中：吉村順三デザインの椅子 下：徽章があしらわれた文具



創立120周年記念のストラップ

2005年（平成17年）11月に設立された藝大アートプラザは、東京芸術大学が企画開発した作品や、教員等が創作した作品、研究室単位の教育研究成果を、社会に対して積極的に発信するとともに、文化芸術を身近なものにして、心豊かな生活や活力ある社会の実現に寄与することを目的としている。

アートプラザでは、現在90名におよぶ作家による約2500点の作品（商品）を展示販売するとともに、書籍類約800種類のほか、CD、DVD、グッズが陳列販売されている。また大学美術館で開催された展覧会にリンクした作品の販売や、奏楽堂演奏会入場券も取り扱っている。

旧芸術資料館へ続く附属図書館1階部分を改修、芸大教授陣がデザインしたアートプラザの建物は、内装を白で統一し、展示された創作作品が自然に引き立つ効果を見せている。

2006年（平成18年）までの入館者は約11万6000人を記録し、開館1周年を経て多くの反響を呼ぶとともに、芸大の枠を越えた、上野の観光スポットとなりつつある。

なお、ここには紹介した作品は平成19年1月のものであって、適宜模様替えが行われている。

設計者 益子義弘（美術学部建築科教授）
清水泰博（美術学部デザイン科助教授）
床面積 223m²

営業時間・お問い合わせ
藝大アートプラザ／株式会社藝大BiOn（ビオン）
Open：4月～11月 10:00～18:00／
12月～3月 10:00～17:30
Close：月曜日、夏季休業日、年末年始ほか
Tel 050-5525-2102

1個200円の“ガチャガチャ”。
「石膏デッサン入門」



学長からのメッセージ 藝術の道場として

宮田亮平

このほど、藝大アートプラザがオープンから一年を迎えました。学内外の多くの方々に認知され、愛されるショップとなりましたことに、感慨深いものがあります。

わが校は、伝統と改革を両輪として、過去から現在へと芸術の様々な分野で多くの人材を輩出してきました。このような大学教育と芸術活動の発展の場として、奏楽堂、美術館、陳列館があります。しかし、大学が法人化され、グローバル化が求められる中で、さらに未来に向かって人材を生み出していくには、多様化した社会へ発信する場が必要であると感じました。藝大アートプラザは、まさにそのような新しい時代に向けた大学ショップとして設立されたものです。

しかしオープンへの道のりは、けっして平坦では

ありませんでした。平山郁夫前学長から多大なお力添えをいただいたのはもちろんのこと、多くの教職員が力を合わせ、学内の設置場所の選定から来館者の流れを考慮した店舗や前庭の設計、仕入れ、芸大ブランドの構築などなど、細かなところまで全国の大学ショップのどこにもないと思われる、芸大ならではの店をオープンすることができたのです。

藝大アートプラザが学内外の多くの方にご利用いただくことを願っていますが、そればかりでなく、芸大に集う若者たちにとって訪れる方々の生の声が聞ける社会との接点となり、また教育の成果を世に問う場所ともなることを願っています。そして藝大アートプラザが、「藝術の道場」あるいは「修練場」として大いに活用されればよいと考えています。

（みやた・りょうへい／東京芸術大学学長）